

松井やより著

女たちのアジア



岩波新書

369



松井やより著

女たちのアジア

岩 波 新 書

369

松井耶依(やより)

東京都に生まれる

1961年東京外国語大学英米科卒業。在学中、
米国・ミネソタ大学、フランス・ソルボン
ヌ大学に留学

1961年朝日新聞社入社。社会部記者として福
祉、公害、消費者問題、女性問題などを取材

1981～85年シンガポール・アジア総局員

現在一朝日新聞編集委員。「アジアの女たち
の会」会員

著書—「現代を問い直す旅—海外の市民運動」

(朝日新聞社)

「女性解放とは何か」(未来社)

「人民の沈黙—わたしの中国記」(すずさわ書店)

「魂にふれるアジア」(朝日新聞社)

「アジア・女・民衆」(新幹社)

女たちのアジア

岩波新書(黄版) 369

1987年3月20日 第1刷発行 ©

1990年6月15日 第12刷発行

定価 550 円

(本体534円)

著 者 まつ い 松 井 や よ り

発 行 者 安 江 良 介

〒101-02 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

発 行 所 株式会社 岩 波 書 店

電話 03-265-4111

印刷・製本 法令印刷

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan
ISBN4-00-420369-4

目

次

	はじめに——アジアとの出会い……………	1
I	新生フィリピンを生み出した女たち…………… ——アキノ大統領とウーマン・パワー	11
II	最貧国の女たち…………… ——絶望の中から自立を求めて	39
III	プランテーションに生きる女たち…………… ——植民地支配・過去と現在	61
IV	近代工場で働く女たち…………… ——日本式経営と女子労働者	81
V	海外出稼ぎの女たち…………… ——虐待と孤独に耐えて	105
VI	性を搾取される女たち…………… ——少女売春と性産業の肥大化	125

VI	伝統的差別と闘う女たち……………	145
	——ダウリーとレイプ……………	
VII	宗教を問い直す女たち……………	165
	——抑圧の道具から解放の武器に……………	
IX	たくましいビルマの女たち……………	187
	——母系社会の伝統……………	
X	韓国民主化を担う女たち……………	203
	——オモニたちの群像……………	
XI	未来を創る女たち……………	221
	——アジア・フェミニズムの胎動……………	
	あとがき……………	243

はじめに——アジアとの出会い

アジアとの出会いは私の青春時代の最も衝撃的な事件であった。“神の前の人間の平等”といった宗教的価値観の中に生まれ育った私は、日本社会の封建的な体質に違和感を持ち、大学時代に、欧米留学という形で脱出を試みた。しかし、西欧社会での人種差別体験に深い幻滅を感じて、結局日本へ舞いもどる決心をして、フランスのマルセイユから船に乗った。一九五〇年代末のことである。

神戸まで一カ月余の船旅で立ち寄ったアジアの港々で目にしたのは、想像を絶する貧困であった。インドのボンベイで路上にうずくまって死にゆく人々、スリランカのコロンボでまつわりついてくる物乞いの子ら、ベトナムのサイゴンで疲れ果ててしゃがみ込む物売りの女たち……。その光景は、二年余を過ごした西欧のまばゆいばかりの豊かさとあまりにも対照的であった。アジアの悲惨だけを見たのならあれほどの衝撃は受けなかったであろう。西欧のあの圧倒的な富に息をのんだすぐあとであっただけに、その富が実はアジアから奪い取られたものなのだと直感させられたのである。

数世紀に及ぶ西欧植民地支配に痛めつけられ、奪い尽され、貧しくさせられたアジアをこの目で見て、同じアジア人として若い私の心は痛み、いいようのない憤りが胸の奥深くに沈澱した。同じ地球上に生まれた同じ人間が、なぜこうまで苦しまなければならないのか。神の前の人間の平等”という思想が、実は西欧白人以外には適用されないことを、思い知らされた。

二年ぶりに帰国した日本は、相も変わらず女性差別の壁が厚く、私が新聞記者の道を歩むことになったのは、ほかに就職先がなかったという偶然からであった。しかし、思いもかけない職業について、アジア体験をそのまま生かすチャンスはなかったが、日本の中の不公正に対する憤りをペンで表現することができた。収奪されたアジア、差別された女性の視点で、六〇年代の日本経済の高度成長から取り残された部分、痛めつけられた部分にひたすら光を当てることが、私の仕事となった。

サリドマイド被害児など障害者問題から始まって、保育所、母子家庭、寝たきり老人など社会福祉問題にのめりこみ、続いて、食品の安全、農薬、欠陥商品など消費者問題を追い、六〇年代末から、公害問題に全力を集中した。水俣の海辺の村で胎児性水俣病の少女と共に過ごした一カ月は、経済大国への道を突っ走り始めた日本の社会のあり方に、根本的な疑問を抱かせるものであった。

公害問題はまた、私の目を再びアジアに向けさせるきっかけともなった。全国的に拡がった

公害反対運動が、企業にきびしい公害規制をとらせる力となり、公害関係法も制定され、裁判でも企業の加害責任が問われるという状況の下で、企業側は公害工場をアジアに移す、つまり公害輸出という手段に出たからである。公害問題の追及は国内だけにとどめることはできなくなった。

そんな中で七〇年から七一年にかけて半年間、公害・環境問題に関する市民運動の取材でアメリカ、ヨーロッパ、ソ連を旅する機会を得た。各国で草の根の市民たちの環境を守る闘いに感銘を受けると共に、アメリカで燃え上がっていた「ウーマン・リブ」と呼ばれた新しい女性解放運動にふれたことは新鮮な驚きであった。日本社会に根強い女性差別に怒りつつも、その差別の構造を深くえぐることもできず、九九パーセント男性社会である新聞社で、女性であることをとくに表に出さずに仕事をしてきた私の十年間の生き方を、問われる気がしたのである。「女性であること」に初めて自信を持つことができるようになって帰国した私は、はつきりと女性ジャーナリストという立場を打ち出し、女性差別の問題に真正面から取り組むことにした。ちょうど七五年からの「国連婦人の十年」は、女性の問題を家庭欄から社会面や政治面に引き出すきっかけに活用できた。

日本の経済発展が国内では女性差別、海外ではアジアを始め第三世界の搾取と抑圧によってなしとげられたことに気づき始めた私は、七四年、「足で体験する東南アジアセミナー」とい

う若者たちのスタディ・ツアーに同行して、まだ戦火の中にあった南ベトナムから、タイ、マレーシア、インドネシアを訪ねた。この旅は私にとって、あの船旅以来二度目の衝撃的なアジアとの出会いであった。人々は十数年前と同じように貧しく、それには驚かなかったが、日本商品があふれ、日本の工場が立ち並ぶ、日本の想像以上の進出ぶりに仰天したのだ。私があればど憤りを感じた西欧の植民地支配に日本がとって代って、アジアから奪う側に立っているのではないか。かつて、軍事力で果たせなかった大東亜共栄圏の夢を経済力で実現しようとしているのではないか。フィリピンのナシヨナリスト知識人レナート・コンスタンチノ氏が「再度の侵略」と名づけた、日本のアジアへの大規模な経済進出が始まっているのを、わずか三週間の旅の行く先々で見たのであった。

この東南アジアへの旅で痛感させられたのは、隣人であるアジアの人々についての自分のあまりの無知、無関心であった。日本の経済発展がアジアの人々の苦痛の上に進められているのに、それに気づかないでいた自分を恥じた。それ以来、私はさまざまな形でアジアにこだわりの続けてきた。客観中立報道を標榜する日本の商業ジャーナリズムの枠内でアジアに関われる限界を知らされて、友人たちと「アジアの女たちの会」というグループを作って個人的にも行動を起こした。買春観光、日韓問題、戦争責任、日系企業的女子労働者など、女性の視点でアジアと日本のつながりを告発しなければと思ったからだ。それは新しい女性解放思想(フェミニ

ズム）にふれて見えてきた日本社会の女性差別構造に挑むことでもあった。『女性』は最後の植民地」といわれるように、先進国による新しい植民地支配に苦しむアジアは、女の目に、よりはっきり見えてきたのである。

七五年の「国際婦人年」メキシコ会議の取材を通し、私のアジアへの関心はさらに第三世界全体、南北問題の中に位置づけられた。きらびやかなドレスの各国政府代表の女性たちが次々に男女平等などを唱える演説をしていた豪華な会議場を出ると、ショールでくるんだ赤ん坊を胸に、道端に座り込んで雨に打たれながら物乞いしていたインディオの母親。あの母子の姿は今も私の目に灼きつき、豊かな国の私に問いかけている気がするのだ。メキシコのエチェベリア大統領が開会演説の中で「最も抑圧されている女性とは、わが子を学校にもやれず、医者にも連れていけない貧しい母親たちである」と述べた言葉が耳に残っている。

第三世界の何億という貧しい女たちが生きる権利を認められるようにならない限り、女性の解放はあり得ない——民間会議で、ラテン・アメリカなど第三世界の女性たちが、アメリカの女性たちにきびしく迫っていた。「私たちから富を奪って築いた豊かさの中で、自分たちの男女平等を主張しているが、私たちはただ生きるために日々苦闘している。あなたたちアメリカの女性は南の国々を貧しくしている体制をこそ問い直すべきだ」と。

マイクを奪い合う場面もあるほどの南北の女たちの激突を目撃して、南の女性たちの痛烈な

告発は、日本にも向けられているのだと、改めて北の先進国の一員である日本女性の立場を考へざるを得なかった。私自身が、日本の国内では女性として差別される側にいるが、他のアジアの国々の女性たちに対しては、アメリカの女性たちのように、収奪する側に属しているという、被害者であると同時に加害者でもある二重性を負わされているのである。

アジアなど第三世界の女性たちとつながることができるとかは、彼女らを抑圧している日本の体制にどこまで挑戦し、抵抗するにかかっているのだ。しかし、そのような立場をとる者は、男性はもちろん女性も大部分が豊かさを享受し、肯定している日本の社会の中では、あまりにも少数派であり、無力感に襲われることもしばしばであった。とくに、買春観光反対のキャンペーンに対する日本の男性たちからの反発は強く、職場での孤立感は深かった。経済的に強い国の男性が、弱い国の女の性を買う。買春観光は南北問題であり、同時に女性差別の表れである。それを非難することは、日本の政治や経済の搾取的構造、そして日本の男性の差別観に挑むことである。それゆえにこそこの問題を追及した私に、職場の内外の男性から、中傷、誹謗、冷笑などいろいろな形で敵意のある反応がかえってくるのだった。私はマニラやバコクで性売る若い少女たちの顔を思い浮かべ、そのような非人間的な性搾取をなくすために奮闘しているアジア各国の女性たちに思いをはせながら何とか切り抜けてきた。

このように傷つきつつアジアと格闘していた私に、アジアで仕事をするという思いがけない

機会がめぐってきた。ちょうど「国連婦人の十年」の後半にあたる八一年十一月から八五年五月までシンガポールの朝日新聞アジア総局特派員として派遣されたからである。「特派員に出てはどうか」という話があったとき、私は「アジア総局ならぜひとも」と答えた。二十余年前、あの留学帰りの船旅でふれたアジアと本格的につき合いたいと願っていたからである。「なぜアジアなんか」「アジアの記事はなかなか載りにくいのに」などといぶかる周囲の声とうらはらに、私には期するところがあった。なるべく多くの国の草の根深く分け入って、自分の目で直かにアジアを見つめ、人々とふれ合い、日本との関わりを探り出そう——そう思いながら日本から旅立ったのだった。

こうして、三年半のアジア特派員時代に訪ねた国は十八カ国(ASEAN五カ国、インドなど南アジア五カ国、ビルマ、インドシナ三国、韓国、台湾、香港の東アジア三カ国、それにオーストラリア)、そのうちフィリピン、タイ、マレーシアなどには何回となく往来した。アジアと一口にいても、その多様性に目がくらみそうであった。イスラム、ヒンズー、仏教など宗教の違い、同じ国の中にいくつもの民族が共存する複合社会、階級やカーストによる途方もない生活格差、言語の数の多さ……、アジアの国々の長い歴史と豊かな文化の蓄積の結果である。同質性の高い日本社会から来て、アジアのわかりにくさに最初は戸惑いもしたが、日に日に、興味を惹かれていった。

アジアはこうした無限の多様性と共に共通性をそなえていた。ほとんどの国が植民地侵略や軍事侵略に苦しんだ歴史を共有しているし、多くの国が軍市政権など抑圧的政治体制にあった。そしてすべての国が第三世界に属し、先進国や大国の経済支配の下で、貧困に喘いでいた。新興工業国と呼ばれ経済発展の目ざましい東アジアの国々から、そのあとを追う東南アジアの国々、最貧国をかかえる南アジア諸国、社会主義体制下のインドシナ三国、経済発展の段階や体制の違うどの国を旅しても、何よりも民衆のあまりの貧しさに胸をつかれた。貧しいとはどういうことなのか。アジア特派員生活で貧しい人々の心にもふれて、自分の生き方とつながる実感を持つことができた。

とりわけ女性たちに、貧しさのくびきが一層重く食い込んでいるのを私は各地で見た。 Bangladesh では生んだ子の半分を失う母親たち、ネパールでは貧困と過重労働で男性より早く死んでしまう女たち、マレーシアやスリランカのプランテーションでは家畜小屋のような長屋に閉じ込められた女たち、タイでは観光地に売られて売春宿の火事で焼死した十歳前後の少女たち、マニラのスラムでは子どもたちに食べ物をやれず精神に異常を来たした母親、インドではレイプや持参金殺人の犠牲になる低いカーストの女たち、パキスタンではイスラムの掟によって笞打ち刑に処せられる庶民の女たち……を、私は知った。彼女たち一人一人の苦痛のほんの一端さえも分かち合うすべもない無力感に打ちのめされることも多かった。



マニラのスラムの出稼ぎ留守家庭の子どもたちと著者(右)

アジアの何億人という女性たちは、三重の抑圧に苦しんでいるのである。南の第三世界に生まれて、北の先進国の経済的・政治的・軍事的支配を受け、勤労者階級として自国の独裁政権や特権階級に抑圧・搾取され、さらに女性として家父長制の伝統の中で男性による性差別を受けているのだ。この二十数年間進められてきた経済開発は先進国本位で、国際的にも国内的にも貧富の差を拡大する結果になった。そんな中で、女性たちは低賃金労働者として、売春婦として、農村やスラムの最貧困層として、商品化され、非人間化されているのである。

しかし、そのような三重の抑圧をはねのけようと声を上げ、行動を起こし始めた力強い女性たちに、どの国でも出会うことができた。

アジアの旅を振り返るとき、女たちの苦しみ思わず流した涙よりも、苛酷な運命に立ち向かっている女たちの姿に感動した涙の方がむしろ強く印象に残っている。たとえばヒマラヤの山村で、文明の利器など何一つない貧しさのきわみの中で、森を守るために木に抱きついて抵抗した「チプロ運動」の母といわれる農婦のあの温かさで威厳に満ちた表情……。彼女の魅力的な人間性は、経済繁栄を誇る中で心満たされず空虚さを嘆く私たち日本の女性の生き方を問にかけている気がした。

アジア各国で開かれた女性の会議をいくつも取材して、いかに多くの女たちが、社会正義と人権を求めて闘っているか垣間見ることができた。シンガポールから八五年春に帰国してまもなく参加した、ケニアのナイロビで開かれた「国連婦人の十年」をしめくくる世界会議でも、十年前のメキシコ会議ではおとなしかったアジアの女たちが、実にいきいきと発言し、行動しているのを見て頼もしく思った。この十年、アジアの女性に対する抑圧・差別は軽くなるどころか、むしろきびしくなったが、そのような状況を認識し、変えようとする女性たちの運動が、八〇年代に入ってどの国でも生まれたのである。彼女たちはお互いがつながりを持って、二〇〇〇年に向けて歩み出している。それは貧困と抑圧からの解放、そして新しい社会を目ざす力強い歩みである。

女たちのアジアに吹き始めた新しい風を身に受けながら、彼女たちの肉声を伝えたいと思う。

I 新生フィリピンを 生み出した女たち

——アキノ大統領とウーマン・パワー——



「ガブリエラ」の国際婦人デー集会(マニラで)